

(ヨハネ11:1～53) ここにはラザロの死を通して回りの人のいくつかの姿が見えます。(1) **マリヤ**：姦淫の現場でとらえられた彼女はイエス様に多く赦されたものとして別の箇所では記されていますが、ここではイエス様に「あなたがいけばラザロは死ななかつただろうに」と不満をもらしています。マリヤにとってのイエス様は「自分の思いの通りにしてくれる人」でした。(2) **イエス様の奇跡を体験した民**：その民たちも「死人は行きかえらせれない」と神を制限してしまうのです。(3) **パリサイ人**：ラザロを生き返らせた後、パリサイ人たちには「このままでは群集がイエスを信じ、ローマ帝国が自分たちを滅ぼしてしまう。」という決め付けが起きてしまいます。ここでの一番の心の問題は自分たちで決めつけているということです。(4) **カヤパ**：この時の大祭司であるカヤパは「ひとりの人が民のかわりに死ななければならない」と言います。これはイエスを殺せばよいではないかという否定的な言葉でしたが、ユダヤ人のリーダーとしてこの地に起こる救いの成就の予言の言葉となったのです。彼らがイエスを殺そうとしなければ、救いは起きませんでした。このように神は小さな生死やあなたの身の回りにおこる小さな問題を通して、すごい意味のあることをしようとしている可能性が高いのです。だから今あなたがその問題に目をとめてだまされるのではなく、そのことを通して何かの結果を見出せばよいのです。神はカヤパでさえ用いたのです。(ヨハネ11:9、10) 光があればつまりかす進むことができます。ラザロの死が人々にとって大きな問題であるのと同じように、あなたにもこのことは大きな問題ということは多々あります。しかし、もしあなたが信じるなら神の栄光を見ると言っているのです。(5) **マルタ**。神様は何でもできると言っていた、マルタ。しかし彼女でさえ、ラザロのいる墓を開けなさいといわれると、「もう4日もたっている」というのです。用件さえ叶えてくれて愛してくれればよいというマリヤ、何でもできるといいながら制限するマルタ、死にまで従うといいながら復活を疑うトマス、私たちにはこのような姿はないでしょうか。「さてイエスは、まだ村にはいらなくて、マルタが出迎えた場所におられた。」(ヨハネ11:30) あなた自身が信じて神の前に出なければ奇跡は起こりません。あなたは、自分のこれまでの知識や考え、価値観で神様を「いる、いない」「できる、できない」「赦す、赦さない」と判断していませんか。私達は周りにはいえます。しかし自分のことになると、「もしかしたら・・・」と心配がおきてしまうものです。しかし心配のほとんどは起きません。だから心配をする前に祈ればよいのです。あなたが信じれば成功するというのが聖書の約束です。神は偉大な方です。そして、私たちに完璧を与えてくださる方です。だからあなたの知っている範囲で神様を考えないでください。神の奇跡をとどめるのは、あなた自身です。神の偉大さは**①求める心に表れる**。決めずに求めてください。やれるやれないは私たちが決めることではありません。そして願うときに信じて求めているか考えてください。求める時に制限をかけず、何でもする事ができると信じて求めていきましょう。心が大切です。**②あきらめな**
い心に表れる。(ヨハネ11:39、40) あきらめずに求めていますか。あきらめずに求めてください。一度祈ったのなら必ずその結果まで見てください。あなたがあきらめてしまったらそこで終わってしまいます。私たちがあきらめないうで信じ続けるなら必ず神の栄光を見ることができるようです。**③全てを益とする**。パリサイ人やカヤパの悪巧みでさえ神様は益とされました。だからあなたの回りで起きている悪いことを悪いことだと認識しないで下さい。悪い問題が起きたときこそ、そこに益となるプラスがあると信じてください。そこで右往左往している人には次はありません。問題が起きたときこそ、信仰をもっているかどうかの真価が問われます。問題は必ず解決される、そう信じたときに、初めてあなたの信じたとおりになります。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」(マタイ16:24) あなたは今信じていることができますか。結果が出るまで決め付けてはいけません。途中経過で問題を見ないで下さい。常識があなたをだめにします。あなたの常識を取り去り、問題1つ1つに新しい結論を出してください。そのために求めて祈り、益になることを信じてください。そして神の栄光を見ていきましょう。